（別紙4（2））

事業所名 グループホームひなたぼっこ

目標達成計画

作成日： 令和 4 年 12 月 4 日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。
目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	18 23 26 27 41	コロナ禍で制限されることが多い中でも、利用者を介護される人ではなく、地域の中で生活してきた目上の方であり、共に暮らす人として、その方の強みを活かしながら自立支援をするという視点が不十分である。	利用者が『快』『やりがい』『自身の価値』が感じられるようにICFの活動と参加を盛り込み、利用者が持っている強みを活かせるようなケアプランを作成する。	①本人の強みをアセスメントし、ケアプランに盛り込む。 ②これまで担ってきた本人の誇りとなっていることや仕事などを活かしたり、再体験できる場面を考える。また、そのために周囲が協力する場面をつくって、共同の力を活かす。 ③記録はケアプラン実行の効果が分かるように記載する。（言葉・表情等） ④記録の書き方学習会行う。(IT化含む)	1年間
2	18 19 20 21	家族アンケートで「利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がありますか？」という問いに対し、「いいえ」が2名、「どちらともいえない」が3名と約1/3の方が否定的な回答であった。利用者が重度化しているため介助場面が増えているのも確かだが、目にみえる活動に囚われ過ぎて、その人の思いに寄り添うゆったりした場面が少ないのではないか。	グループホームにおいて、利用者が主体であり、私たちは生活支援をすることが仕事であるという原点に立ち返り、業務のあり方を見直す必要がある。	①日常の業務をただ職員がこなす仕事としないで、どう利用者と一緒に日常生活を営むかの視点で、見直していく。 ②それぞれのできることを活かして、日常の生活場面で利用者が活躍してもらうことを増やす。（ケアプランに組み込む） ③ケアプランに、個別にとるコミュニケーションの内容を具体的に記載し、その人がゆったりと話しを聞いてもらえた、寄り添ってもらえたという安心感が得られるケアを行う。利用者同志の会話も、お互いをポジティブに感じられるものになるようにサポートする。	1年間
3	6 7 13 40	利用者に対して馴れ馴れしい言葉使いになったり、利用者への態度が威圧的になる場面が見られる。またプライバシーの配慮が欠ける場面もみられる。	利用者に対して尊厳を持って関わることが出来るようになる。目上の方に対する言葉使いや不適切ケアに注意しプライバシーの配慮が出来るようになる。各人がアンガーマネジメントを意識し、職員間でお互いに気づきや意見交換が出来るようになる。	①職員の申し送り後に、ひなたぼっこ虐待防止行動指針の文章の読み合わせをする。 ②カンファレンスでコンプライアンスルールの読み合わせをする。 ③不適切ケア防止トレーニングシートを活用し勉強会を行う。 ④アサーションの学習会を行う。	1年間
4	19 20 55	コロナの影響で家族や地域との交流が難しく、つながりを感じることが少なくなってしまった。感染対策もしつつ家族や地域とのつながりを感じられるようになる。	家族とのつながりを大切にするため、感染予防をしながら本人と家族のつながりを感じられるようになる。	①状況に応じてオンライン面会、窓越し面会も継続しつつ面会制限を緩め、家族に会える機会をつくる。　②職員は家族が訪問された時に笑顔で向かえ、面会時は必ず感染対策を行い制限時間10分を伝え本人の最近の様子を報告する。 ③本人のストーリー性を持った情報でアルバムを作成し家族や本人に見てもらう。 ④毎月の家族の便りで日常の様子を報告する。	1年間

注）項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。